

# 自ら答えを見出し実践できる生徒の育成（問題発見・解決能力の育成）

## ～特別活動・総合的な学習の時間を核として～

### 1. 研究主題の設定の経緯

#### (1) 前研究より

本校では令和4年度～6年度の期間で「主体的な学び手（自走者）の育成 ～自ら問いを持ち続け、粘り強く学ぶ生徒の姿のために～ 」という研究主題を設定し、道徳を柱として研究を実施した。

昨年度の道徳および自己実現に関するアンケート（表1）では、自己決定する力をもっていると思うが、最善を選択できているか、周囲に認められるかについて不安を持っている生徒が多く、自己肯定感の低さが伺える。また、自分のクラスに関するアンケート（表2）、自分と仲間の関係に関するアンケート（表3）については、自分の意見を気兼ねなく言える人間関係ではなく、仲間と話し合い、合意形成する活動が難しいことが伺える。

以上のことから、道徳研究を取り組んだ成果として生徒の自己決定力の向上がみられたものの、依然として人間関係の希薄さ、特に心と心がつながるような人間関係の構築ができておらず、他者と関わり合いながらよりよく問題を解決するに至らないという課題が残った。道徳性を向上させるためには自ら考え自己決定し、成功や感動を体験できる機会を意図的に増やし、人と人との関わりを通じた体系的な学びが必要なのではないかという考えに至った。

#### (2) その他の調査結果より

本校では、全国学力・学習状況調査のほか、毎年、年度の始めと終わりに Hyper-QU 調査を実施し、生徒の実態や変容の把握に努めている。（表4）は、それらのアンケート結果である。この結果からも相互理解、合意形成が希薄であることがわかった。これらのことから、本校の課題は「人と関わり、つながる力の向上」であると言える。

（表1）道徳および自己実現に関するアンケート抜粋

質問項目	肯定的な割合
大切な物事を自分で決める能力をもっていると思う。	74%
大切な物事を自分で決めるとき、その決断を周囲に聞いてもらえる、認めてもらえると思う。	72%
大切な物事は自分で決めるよりも誰かに決めてもらったほうが良い結果を生むと思う。	41%
自分で決めたことは不安でうまくいかないことが多いと思う。	47%

（表2）自分のクラスに関するアンケート抜粋

質問項目	肯定的な割合
自分たちの生活の活動や言動を振り返って、次の課題に向けた具体的な内容を話し合っている。	71%
一人ひとりが学級全体に自分の意見を述べることができている。	71%
意見や考えが人と違っていても、自分が正しいと思うことをみんな主張できている。	77%

（表3）自分と仲間の関係に関するアンケート抜粋

質問項目	肯定的な割合
私は学級活動で学級全体に自分の意見を述べることができる。	62%
意見や考えが人と違って自分も正しいと思うことを主張できる。	70%
私は友達や学級のためになることは、自分で見つけて実行している。	79%
学級活動で発言するとき、恥ずかしいと思わない。	55%

（表4）その他の調査 抜粋

調査種類	質問項目	全国・県との比較
hyper-QU	人との関わりに関すること	- 3ポイント
全国学力 学習状況調査	自分と違う意見に対して考えることは楽しいですか？	- 6ポイント
	学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか？	- 6ポイント

### (3) 本校の目指す生徒像

本校では次に掲げる生徒の育成を目指し、教育活動を行っている。

- 1. 主体的に学ぶ生徒
- 2. 多様な価値観を認めながら、協働的に活動できる生徒
- 3. 心身の健康に留意する態度、折れない心をもつ生徒

1の主体的に学ぶ生徒とは、自ら課題を見出し解決する生徒であり、研究主題そのものと言える。研究主題に迫るためには、2, 3のように自己の考えだけでなく他者や社会との関わり、つながる資質・能力、いわゆる社会性（社会的能力）が不可欠である。そのため自己と他者を理解し、人と人との関わり の機会と体験を通して社会性（社会的能力）を向上させ、これを土台として研究主題へとつなげたい。

## 2. 先行研究より

### (1) 問題発見・解決能力について

学習指導要領では、「各教科等において、物事の中から問題を見だし、その問題を定義し解決の方向性を決定し、解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、振り返って次の問題発見・解決につなげていく過程を重視した深い学びの実現を教科等の特質に応じて図ることを通じて、各教科等のそれぞれの分野における問題の発見・解決に必要な力を身に付けられるようにするとともに、総合的な学習の時間における横断的・総合的な探究課題や、特別活動における集団や自己の生活上の課題に取り組むことなどを通じて、各教科等で身に付けた力が統合的に活用できるようにすることが重要である。」と示されている。<sup>※1</sup>

このことは、経済産業省が提唱している、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力（社会人基礎力）の1つである「考え抜く力（Thinking）」<sup>※2</sup>につながるものであり、VUCA<sup>※3</sup>の時代を生きる子どもたちにとって重要な資質・能力である。

※1 中学校学習指導要領 総則解説 p.52

※2 経済産業省中小企業庁 「我が国産業における人材力強化に向けた研究会」（人材力研究会）報告書 p.27 平成30年3月

※3 Volatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）の頭文字を取った造語で、現代の先行きが見えず、予測不可能なビジネス環境や社会状況を示す言葉。

### (2) 社会的能力の育成

社会性を育成する方法として注目したのが福岡教育大学名誉教授 小泉令三氏が考案したSEL－8S学習プログラムである。<sup>※1</sup> 本プログラムの基礎となっているSocial and Emotional Learning（通称SEL）は、日本では「社会性と情動の学習」と訳され、2022年、12年ぶりに改訂された「生徒指導提要」にも児童・生徒の社会性の発達を支援するプログラムとしてSELが明記された。

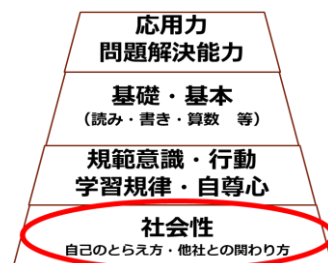


図1 学力・学校適応と人間関係能力の関係

#### 【SELで育成を目指す社会的能力】

- 1. 自己への気づき
- 2. 他者への気づき
- 3. 自己のコントロール
- 4. 対人関係
- 5. 責任ある意思決定
- 6. 生活上の問題防止のスキル
- 7. 人生の重要事態に対処する能力
- 8. 積極的、貢献的な奉仕活動

これらの社会的能力を育成するためにこれまで構成的グループエンカウンターやソーシャルスキルトレーニング、アンガーマネジメントなど様々な活動を学校教育の中で行ってきた。これらを体系的にまとめ、プログラム化したのが SEL である。これを特別活動の柱として学活の時間だけでなく、教科横断的に価値項目を設定し、普段の学校生活だけでなく行事も実践の場として設定し、年間カリキュラムを作成して実践する。

※1 小泉令三（2011） 社会性と情動の学習（SEL-8S）の導入、実践（ミネルヴァ書房）

上記の社会的能力1～5はSELを提唱し始めたアメリカのNPO団体CASELが位置づけているもので、Core 5(コア・ファイブ)とも呼ばれている。知識や技能といった認知能力ばかりでなく、興味関心、意欲、協調など、感情や心の動きに関する能力「非認知能力」もつけていこうとする教育である。

<Core 5 (コア・ファイブ)>

- 自分を理解する力 (self-awareness)**  
自信をもって成長マインドセットで、自分の強みや弱みを理解することができる。
- 他者を理解する力 (social awareness)**  
多様な背景や文化を有する人たちの視点を理解して、共感したり思いやったりすることができる。
- 自分で自分を統制する力 (self-management)**  
ストレスとうまく付き合っ、自分の衝動を適切にコントロールし、自分で目標を設定して到達していくために自分を動機づけることができる。
- 他者とうまくやっていく力 (relationship skills)**  
他の人とうまくコミュニケーションができ、協力できる。不健全な場の空気に流されない。対立を建設的に解決する。他人に助けを求めたり、自分から他人を助けることができる。
- 適切な意思決定をする力 (responsible decision-making)**  
自分の行動や、他人とのやり取りの中で、倫理的基準や安全性、社会的規範に基づいて、建設的な選択をすることができる。

(3) 問題発見・解決能力の育成のためのアプローチ

～総合的な学習の時間における「プロジェクト型学習 (PBL:Project Based Learning)」の導入～

① プロジェクト型学習とは

プロジェクト型学習 (PBL : Project Based Learning ) は、問題解決型学習、または、課題解決型学習などとも呼ばれる。PBL で取り組む問題は実社会に即したものであり、それらの解決策を考察することで問題解決能力や思考力を育成する。

② 探究学習と PBL の違い

探究学習と PBL は、「課題の設定が教員か生徒か」「課題が教科限定的か学際的か」「評価のポイントはプロセスかアウトプットか」「期間は短いか長いか」において異なる。ただし、両者の区別は必ずしもはっきりしたものではない。探究学習のあり方は多様であり、その中に含まれる学習方法の1つが PBL であるというイメージである。

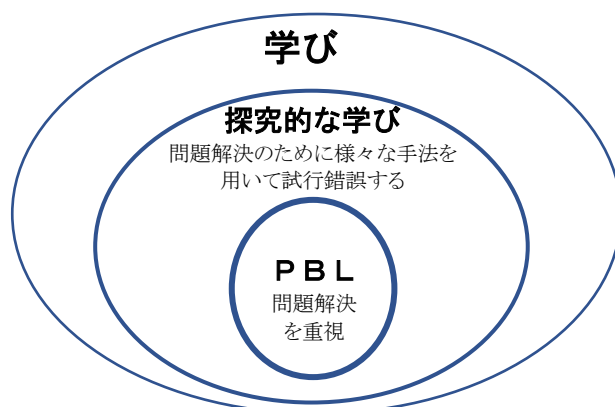


図2 「学び」全体と「探究的な学び」、「PBL」の関係性のイメージ

### ③ 探究学習と PBL の比較

	探究学習	PBL
学習の流れ	①課題の設定 ②情報の収集 ③整理・分析 ④まとめ・表現	①問題の提示 ②知識の活用 ③問題解決
課題の設定者	教員が与える場合も生徒自身が設定する場合もある。	生徒自身が設定することが多い。
課題の性質	1教科で完結するものから教科横断的なものまである。	実社会に即しており、学際的である。
評価のポイント	自分なりの答えを導くプロセスに注目する。	どのような解決策を示すかという仕上げの部分に注目する。

A 類似点 「学習の流れ」が類似しており、どちらも「問いの設定→情報・知識の活用→結論の提示」とまとめることができる。

B 相違点 「課題の設定者」、「課題の性質」、「評価のポイント」、「期間」において異なる。ただし、その違いは必ずしもはっきりしたものではなく、両者はグラデーションのような関係性となっている。

また、表からわかるように、PBLと比較すると探究学習の特徴には幅がある。したがって、上の図のように、探究学習という広い概念の中に含まれる学習方法がPBLであると捉えられる。

<言葉の整理>

- ・PBL (Project Based Learning) :プロジェクト型学習。課題の解決に向けて、知識を応用していくための力を身に付ける授業のこと。
- ・SBL (Subject Based Learning) :科目進行型学習。従来の知識を詰め込んでいく暗記型の授業のこと。

### (4) 総合的な学習の時間 (PBL) と SEL との関連について

PBL (プロジェクト型学習) と SEL (社会性・情動面の学習) は、以下の理由で互いに相乗効果をもたらす密接な関係にあると考えた。

#### ① PBL を効果的にする基盤としての SEL

PBL は、生徒がチームで協力し、複雑な課題を解決するプロセスを重視している。この過程で、SEL で養われる以下のスキルが不可欠である。

**A 自己理解、他者理解、自己管理** : 多様な価値観や多様な人々を理解する力、長期的なプロジェクトを粘り強く取り組む力。

**B 対人関係スキル** : チーム内での意見の相違を解消し、合意形成を図るなど効果的にコミュニケーション力。

**C 責任ある意思決定** : 課題解決のために適切な選択肢を評価し、決定する力。

#### ② SEL を実践・強化する場としての PBL

SEL で学んだ概念 (共感や協力など) を、PBL という「実践の場」で活用することで、スキルが定着する。

**A 社会意識の向上** : PBL のテーマとして「地域の課題」などを扱うことで、他者への共感や社会的な視点を養える。

**B 自己認識**：チーム内での自分の役割や、得意・不得意を客観的に把握する機会になる。

### ③ 相乗効果

PBL と SEL を並行して実施することで、生徒は学力（認知的能力）だけでなく、非認知的能力（やり抜く力、協調性など）を同時に高めることができ、学校生活だけでなく、将来の社会生活においても役立つ「生きる力」の育成につながると考えた。

## 3. 研究の実際

### (1) 方法

#### ① 1年目 SEL および PBL についての調査・研究

- ・書籍、文献による調査・研究
- ・日本 PBL 研究所主催による PBL メッセへの参加 (6/14)
- ・SEL-8 研究会（代表：小泉令三）主催による SEL-8 教員等研修会への参加 (6/13) (11/28)
- ・SEL 先進校（広島県府中町立府中緑が丘中学校）視察 (9/23～25)
- ・PBL 校内研修（講師：元入船小学校 酒井正恵 主幹教諭）(10/8)
- ・SEL-8 S プログラムを導入した特別活動の実施 (6/26 7/9 10/29 11/11 11/27)
- ・PBL を導入した総合的な学習の時間の実施（テーマ：①明海の街の魅力とは何だろう  
②人にとってふるさととは何か  
③明海中学校の魅力とは何だろう）（通年）
- ・学びの変革事業（問題発見・解決能力）に係る校内研修（講師：土田雄一 敬愛大学教授）(1/28)
- ・SEL 校内研修（講師：小泉令三 福岡教育大学名誉教授）(2/18)
- ・日本 SEL 学会主催
- ・日本 SEL 学会主催による日本 SEL 学会第 2 回大会への参加 (3/21)
- ・各教科における「指導と評価の計画」の作成と実施（問題発見・解決場面の創出）

#### ② 2年目

- ・SEL-8 S プログラムを導入した特別活動の実施
- ・問題発見・解決能力を念頭に置いた特別活動（学級活動）の実施
- ・本校独自の特別活動（学級活動）のカリキュラム作成
- ・PBL を導入した総合的な学習の時間の実施
- ・PBL を導入した総合的な学習の時間のカリキュラム作成
- ・学びの変革事業研究発表会 (10/2)

#### ③ 3年目

- ・本校独自の特別活動（学級活動）のカリキュラムの完成
- ・PBL を導入した総合的な学習の時間のカリキュラムの完成

## (2) 研究の実践

### ① Social and Emotional Learning (SEL・社会性と情動の学習) について

- SEL-8S プログラムを導入した特別活動の実施 (別紙資料1)
- SEL 先進校 (広島県府中町立府中緑が丘中学校) 視察 (別紙資料2)
- SEL 校内研修 (別紙資料3)



写真左: SEL 授業の様子



右: SEL で学んだ内容を示した掲示物

### ② Project Based Learning (PBL・プロジェクト型学習) について

- PBL を導入した総合的な学習の時間の実施 (別紙資料4)
- PBL 校内研修 (別紙資料5)
- 学びの変革事業 (問題発見・解決能力) に係る校内研修 (別紙資料6)



写真上段: スクリーンに映されたスライドの一例

写真下段: 各グループごとに発表している様子

#### 4. 成果と課題

##### (1) SEL における社会的能力の育成について

6月中旬から12月末までの間に、SELー8の授業を5回（ストレスマネジメント、学級活動、エゴグラムなど）を行い、普段の生活の中で、また林間学校で実践の機会を提供し実践した。

図3は、9月と12月に実施したSELアンケートの結果である。結果を見ると全体的に数値の上昇が見られた。SELの授業による知識や活動を普段の学校生活で実践するように促したり、多くの教員が2学年生徒と関わっていることが各項目の値の上昇につながったと

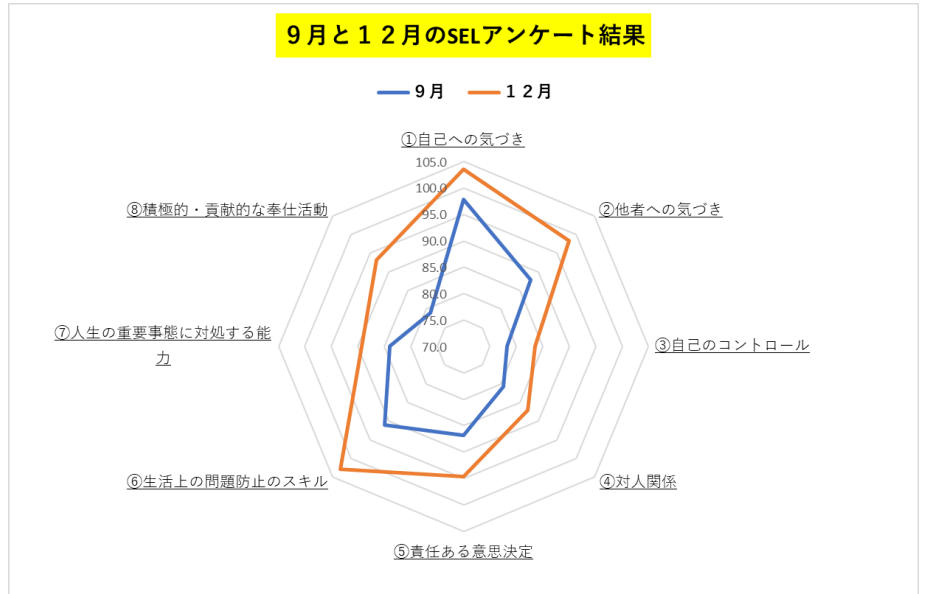


図3 SEL 授業実施前と実施ごとのアンケート結果

考えられる。また、その中でも特に、①自己への気づき、②他者への気づき についての授業を多く実施したこともあり、①と②において高い数値を示した。

一方、③自己コントロール、④対人関係については、他の項目と比べると値が低い。これらの項目の値をさらに高めていくために、①自己への気づき、②他者への気づきを生かして仲間と関わる実践の機会を今後も継続的に提供していく必要がある。

##### (2) PBL における資質・能力の育成について

右の表は、全校生徒を対象に実施した令和6年度と令和7年度の学校評価アンケート結果から、PBLに関連した項目を抽出したものである。

「郷土愛」「豊かな関わり」「地域貢献」「問題発見能力」「課題解決能力」の各指標にポイントの上昇が認められた。

このことから総合的な学習の時間におけるPBLの導入（生徒が実社会・実生活に根差した問いを主体的に設定し、情報の

収集・整理・分析を経て、考察・表現に至る一連の探究過程）に一定の成果があることが示唆された。

今後は、郷土愛や協働性といった情意的側面をより精緻に測定する評価指標を構築していくとともに、に総合的な学習の時間におけるカリキュラムの体系化、成果物の発表・評価方法の改善がに取り組むことで、PBLの効果検証を図っていきたい。

表 PBL に関連した学校評価アンケートの質問項目

関連項目	質問内容	変化
地域貢献 郷土愛 豊かなかかわり	地域の活動や行事に関心がある。	R6 R7 70%⇒77%
問題発見 課題解決	明海中の授業は「わかる」「できる」と成長を感じられる。	R6 R7 79%⇒91%
学校行事 豊かなかかわり	明海中の学校行事は、生き生きと活動できる楽しい場となっている。	R6 R7 83%⇒90%

<参考文献・資料>

小泉令三（2011）社会性と情動の学習（SEL-8S）の導入と実践 ミネルヴァ書房

小泉令三・山田洋平（2011）社会性と情動の学習（SEL-8S）の進め方 中学校編 ミネルヴァ書房

小泉令三・山田洋平（2011）社会性と情動の学習（SEL-8S）の進め方 小学校編 ミネルヴァ書房

小泉令三・山田洋平・大坪靖直（2017）教師のための社会性と情動の学習（SEL-8T） ミネルヴァ書房

藤原さと（2020）「探究」する学びをつくる 社会とつながるプロジェクト学習 平凡社

稲垣忠（2020）探究する学びをデザインする！情報活用型プロジェクト学習がイノベーション 明治図書

稲垣忠（2022）探究する学びをステップアップ情報活用型プロジェクト学習がイノベーション2.0 明治図書

プロジェクト型総合学習のためのログブック教師用手引書 日本PBL研究所